

画期からみた堺の考古学的研究

白神 典之

本論のテーマにあげた堺とは現在の堺市域をさしている。堺市がこれまで合併を繰り返して市域を拡大してきたことはいうまでもなく、現在の市域は摂津、和泉、河内の令制国に跨っている。たしかに堺市域ではあるが堺地域と呼んでもよいだろう。

本論は堺地域の通史で認められる5つの画期それぞれを章とし、さらに序章と終章を合わせて7章構成とした。

序章では、本論の必要性和画期について述べる。先行研究として、三浦周行監修の『堺市史』や豊田武の『堺—商人の進出と都市の自由—』、泉澄一の『堺—中世自由都市』などの優れた業績はあるものの、90年以上前のもの、あるいは時代が限定されるもので、考古学を扱うところはあってもごく一部である。ほかに朝尾直弘ほかによる『堺の歴史』(4)は通史仕立ての名著ではあるが、考古学で扱う部分は極めて限定的である。こうした中で考古学的考察を中心に堺の通史を描写することは新鮮であり、たいへん意義深いと考える。

地域の発展には盛衰がつきものであり、堺という地域において認められる盛衰の波のピークをとらえることは可能である。この盛衰の盛たるピークの部分は、地域の歴史における画期でもある。堺という地域を通史として俯瞰する中でその画期は百舌鳥古墳群に代表される古代、堺の地名が登場し堺の町が誕生する古代末から中世前期、戦国時代を中心に商人の町として日本の経済を支え、茶の湯文化が開花し堺の全盛期といえる中世後期、戦乱が収まり平和な町として発展した近世、明治維新となって新たな文明化が進む近代にあるとすることができる。

本論の目的は、この5つの画期を通した地域史のありようについて主に考古学的手法を用いて明らかにしながら、堺という地域の発展を解明することである。

第1章では古代の堺に関わる百舌鳥古墳群の仁徳天皇陵古墳を中心に考察した。堺地域発展の画期としての第一は、巨大前方後円墳を中心に形成された百舌鳥古墳群の時代にあたる。百舌鳥古墳群における巨大前方後円墳の実態については不明な部分が多く、過去

に得られていた情報などがこれまでに十分に集成、評価されてきたとは言い難いところがあった。本章はそうした埋もれた資料を読みときながら、多少なりとも巨大前方後円墳の実態に迫ろうと試みたものである。また、同時代の堺では様々なモノづくりが行われたが、埴輪や須恵器といった窯業生産がとりわけ顕著であった。ここでは古墳と併せてこれらの生産遺跡に関連する事象についても積極的にとり上げることで、歴史上の位置づけやこの地域の役割についても評価し、考察を重ねた。また、遺跡の保護の観点から、その最上位ともいえる百舌鳥古墳群の世界遺産登録をとりあげ、さらには須恵器生産遺跡である陶邑窯跡群の顕彰過程についても明らかにし、この地域が長い歴史のなかで遺跡の破壊が進みつつも、日本の埋蔵文化財保護におけるひとつの原点たる面についても考察した。

第1節では、百舌鳥古墳群研究の基礎となる古墳それぞれの築造順序について、百舌鳥古墳群を構成する各古墳の資料は決して十分ではないが、先学諸賢の見解を整理しながら考察した。百舌鳥野の古墳時代、すなわち百舌鳥古墳群が築造された当時の百舌鳥地域を考えるに際してまず必要なことは、百舌鳥古墳群を構成する各古墳、とりわけ大型古墳がどのような順序で築造されたのかということであろう。これまで多くの研究者が百舌鳥古墳群の築造順序についての見解を出しているが、それぞれの視点が異なることもあって、全く同じものは存在しない。本節では古墳出土の須恵器を軸に古墳編年の検討を試みた。主墳と陪冢の捉え方にはいまだ課題が残るものの、百舌鳥古墳群内の古墳編年について一定の整理を行うことができた。35年前に行った古墳編年ではあるが、現在の古墳編年とほぼ差異はない結果となっている。

第2節では、百舌鳥古墳群中最大規模の仁徳天皇陵古墳の築造時期に関して、古墳と直接関連する時期決定資料に限られるなか、古墳周辺の遺跡のありようからそれに迫られる可能性を示すべく考察した。仁徳天皇陵古墳の築造時期の決め手としては、資料数が多いこともあって埴輪が有力な材料であることは言うまでもない。現在の埴輪研究では、築造時期は5世紀中頃を中心に考えられるところである。埴輪以上に詳細な年代を求め得る材料に須恵器があり、仁徳天皇陵古墳東側造り出し出土の須恵器甕がその代表である。これによって、5世紀の第二四半期の年代をあてられることが多い。また、古墳から得られる資料を用いる他にも、古墳周辺の遺跡のあり方から手がかりを得ることもできる。仁徳天皇陵古墳の三重濠の東南隅に阻まれるような形で谷地形があり、そのやや下流にある大仙中町遺跡において埋没した谷が検出されている。この谷は仁徳天皇陵古墳が築造された時に古墳の造成箇所である谷は埋められており、古墳より下流の水流は極端に減少したとみ

られる。古墳より下流の地点において、古墳造成によって谷が埋められる前のまだ水流が盛んにあった頃のものと思われる土器群が検出されており、その中に須恵器が含まれている。仁徳天皇陵古墳造り出し部の須恵器とおよそ同時期のものであり、仁徳天皇陵古墳築造時期を決定する傍証になり得たと考える。

第3節では、仁徳天皇陵古墳の三重濠は築造当初から設定されたものであることを後世の資料などを用いて考察した。仁徳天皇陵古墳は史上最大の前方後円墳であるとともに、完備された三重濠の姿をもっている。この三重濠については、当初からあったとする意見の他、当初は完周していなかったものが近代以降に改造された結果であるとする意見が出されている。本節では、三重濠が当初から完周していなかったとする根拠はないことを確認したうえで、改めて18世紀前半の絵図を検討することで三重濠が当初から存在したことを確認した。ただし、現在の三重濠の構造、規模は近代の改造の影響を受けていることはいうまでもない。

第4節では、明治5年(1872)に発見された仁徳天皇陵古墳前方部の埋葬施設に関する情報を総合的に検討し、本墳の第一の被葬者の姿をも考察した。仁徳天皇陵古墳は、周堤の発掘調査は行われているものの、埋葬施設の発掘調査は行われておらず古墳の詳細な情報はない。このようななか、明治5年に発見された前方部の石槨と石棺及び副葬品を記録した絵図や文書は貴重な資料である。副葬品の金銅製甲冑、ガラス器の検討を通じて、古墳では通常なかなか副葬されるものではない貴重な品であることを確認し、その上で、前方部中段斜面という埋葬施設として通常はあり得ない位置に葬られた被葬者の序列の検討を通して、後円部中央に埋葬されたであろう主たる被葬者の並々ならぬ地位を傍証した。

第5節では、現在宮内庁所管である天皇陵となっている古墳の名称について様々な議論があるなか、古墳の命名においても地域における1000年を超える歴史を評価することも大切であることを考察した。古墳の名称については、地域での呼称、あるいは地名に基づく命名が基本であることは言うまでもなからう。そうした中、天皇陵古墳について、本来の被葬者が明らかではない中で天皇名を冠する限り、その天皇が被葬者であるとの意識を植え付けることへの危惧が指摘されて久しい。天皇陵についても命名の基本である地域呼称なり地名に基づくべきとの指摘である。こうした指摘もあって、実は天皇陵などの陵墓古墳については研究者による命名の違いなども加わり、多くの名称が存在し、それが混乱につながっているのも事実である。本稿では天皇の名称を冠した命名についても、長ら

く地域で刻まれてきた歴史があることを指摘し、それを全否定するものではなくその歴史が持つ意味も大事であると指摘した。付節ではニサンザイ古墳の名称について考察した。百舌鳥古墳群にあるニサンザイ古墳の名称については、これまで検討される機会のないまま受け入れられてきた。名称が「陵山」とみえる近代初頭の文書が見つかったことを機に近代初頭以前の史料をあらためて確認したところ、近代初頭以前における名称は「御陵山」「陵山」で、それ以降になって「ニサンザイ」の名称がみえることを確認した。

第6節では、百舌鳥古墳群が世界的な評価を得ることとなった世界遺産登録について、その意義を考察した。令和元年（2019）、百舌鳥古墳群が百舌鳥・古市古墳群として世界遺産に登録された。世界遺産登録は観光に資するものとして喜ばしいといった見解が広く表明されている。しかしながら、世界遺産の目的は資産の保全である。百舌鳥古墳群の場合、陵墓以外の古墳の保全としては、大正時代の「史蹟名勝天然紀念物保存法」による3基の仮指定からはじまり、「文化財保護法」でこの3基に4基を加え7基の古墳が昭和49年までに国史跡指定を受けていた。その後、長年にわたり新規の指定はなされてこなかった。世界遺産登録をめざす過程で未指定の古墳の史跡指定が大きく進み名称変更もあって、百舌鳥古墳群（周濠のみの指定などを含み現在は19基で構成）の名称で国の史跡となったのである。法的な保護の担保を得たこのことが最大の意義であろう。また百舌鳥古墳群は古墳の価値のみならず、古墳が築造された時代の背景を伝える物証であることを指摘した。のちに世界遺産となる百舌鳥古墳群が築造された当時、堺の地域は政権中枢と密接な関係を持ち、時代の表舞台にあったといえよう。

第7節では、市内所在の日置荘埴輪窯跡群の埴輪や畿内の古墳を中心に埴輪が終いを迎えていく過程を辿った。古墳の墳丘を飾った埴輪は、古墳の発達とともに変化しながら、前方後円墳の終焉までほぼ存続していた。堺市東区の日置荘埴輪窯は大規模な埴輪生産遺跡であると考えられているが、そこで生産された埴輪が立てられた古墳は確認されておらず、謎の多い埴輪といえる。これまでに、研究者の間で供給先の古墳が議論されてきたところである。大型で大量に生産された日置荘埴輪が立てられるべき古墳は、大型の前方後円墳を想定するほかなく、松原市と羽曳野市にまたがる河内大塚山古墳を最有力候補とすることはほぼ定説である。あとは被葬者と関わる古墳の築造時期であるが、日置荘埴輪を6世紀第4四半期をも含めた時期幅をもって考えるべきとの結論を提示した。

第8節では、百舌鳥古墳群と並ぶ古墳時代の大遺跡である陶邑窯跡群の文化財的意義について考察した。堺の地域に分布の大部分がある陶邑窯跡群は、わが国の窯業の技術革

新を達成した出発点でありその価値は明確である。いっぽうで泉北ニュータウン建設によって多くの窯跡が発掘調査されたが、発掘調査を経た窯跡はごく一部を除いて破壊されてしまった。もちろん、泉北ニュータウン計画当初から保存緑地とされた範囲内にあった窯跡は保存されてはいるがその数は多くはない。この時の発掘調査の出土品の一部が「文化財保護法」に基づき平成17年に国の重要文化財に指定されている。また、遺構としての窯跡は、高蔵寺73号・74号窯跡が「大阪府文化財保護条例」に基づき平成5年に府の史跡に指定されている。本稿では「大阪府古文化記念物等保存顕彰規則」によって昭和31年に史跡指定された陶器山古代窯跡について、長らく所在不明であったがその所在を明らかにするとともに、大阪府において早くに陶器窯跡群が重要視され保存策が講じられたその文化財的意義を明らかにした。

第9節では陶器窯跡群域に広がる後期群集墳について、埋葬施設の多様性と特徴的な事例を検討し地域ならではのあり方を示すことを考察した。須恵器の生産を初期より大規模に行っていた陶器窯跡群域に広がる泉北丘陵、信太山丘陵には古墳時代後期の群集墳が展開している。群集墳の墓域は窯跡群の支群のほぼそれぞれに対応すると考えられることが多い。ただし、信太千塚古墳群は他とは異なり須恵器生産とは関係はやや薄いと考えられる。陶器窯跡群域における有力な群集墳は信太千塚古墳群、牛石古墳群である。埋葬施設は横穴式石室、竪穴式小石室、横穴式木芯粘土室、木棺直葬など多彩である。横穴式木芯粘土室は須恵器生産との関係について語られることが多かったが、本稿では他の埋葬施設のあり方も勘案し石材が乏しいということも大きな理由ではないかと考えた。

第2章では、古代から中世前期の堺について、少ない事例ながら考察した。古代の末期である平安時代後期に摂津国と和泉国の国境線上に誕生した堺の町。この堺の町の位置がどこであったのかは、町の起源に関わる重要な問題である。堺が摂津国、河内国、和泉国の三国の境に発展したといういわゆる定説に挑んだ。あわせて鎌倉時代の堺近郊農村部にかつて所在した寺院について、遺跡の分析からその故地について考察した。

第1節では、堺の地名起源というこの地域で最大級の課題について、刊行後90年を超える名著『堺市史』の内容に異を唱えつつ考察した。堺の地名起源について、これまでは摂津国、河内国、和泉国の三国の国境に町が成立したことによるもので、その町がやがて西へ移ったと主張されてきた。本稿では、堺はそもそも二つの境であり、堺の町はもともと摂津国と和泉国の国境線上に発展していることを埋蔵文化財の調査成果で判明した古代遺跡のあり方をもとに考察した。国境にできた町という、他にはない堺の個性がここにあ

るとみるべきであろう。これまで言われてきた三国の境は、三国ヶ辻、三国ヶ丘であって堺ではなく、堺は二国の国境であることを明らかにした。都市部としての堺の誕生は現在の堺につながる直接的な画期であった。

第2節では、鎌倉時代の高僧叡尊の『感身学正記』にみえる河内國長曾根莊「清浄光院」について、その痕跡を遺跡として確認できることを考察した。西大寺の僧叡尊は、弘安8年（1285）9月19日から23日まで、河内國長曾根莊清浄光院において大法会を営んだと記録されているが、現在、堺市北区長曾根町周辺の広い範囲においても、この西大寺叡尊や真言律宗と関係の深い「清浄光院」と言う名の寺院は存在しない。同地域の考古学的な遺跡の発掘調査で、たとえば13世紀後半の遺物が出土するところや、たとえば寺院の存在が想定できる瓦などが出土するところがあれば、清浄光院の故地の候補となり得ると考えられた。同地域の新金岡更池遺跡はこの条件を満たす有力な候補地である。本稿ではこれに加えて、本遺跡から出土した軒丸瓦の文様が清浄光院と同じ真言律宗の京都市の壬生寺で出土し、壬生寺と同文の瓦が同宗の堺市西区の家原寺や鎌倉市の極楽寺で出土していることから、新金岡更池遺跡の13世紀代の寺院は西大寺と関係が深い真言律宗である可能性が極めて高いといえ、清浄光院である可能性が極めて高くなるという結論を導いた。

第3章では、室町時代、戦国時代、織豊期にわたる中世後期にみられた第三の画期を考察した。この画期はこの地域における最大の画期ともいえるものである。この時代の堺は、日本の富の多くが集中する町であった。その堺の多くの町人が茶の湯に傾倒していたことを発掘調査成果に加え文献史料も用いながら考察した。とりわけ、まちを濠で囲む環濠を形成し環濠都市とも呼ばれるようになって以降、町はさらなる膨張をつづけた。多くの商人が富を蓄えたことは宣教師の記録に「大なる商人あり。日本の金銀の大部分が集まる。」などと見えているが、発掘調査成果のひとつに夥しい茶道具の出土がある。ここに堺の富の一端を垣間見ることができるのであり、その茶道具、ならびに茶室について考察した。さらに、茶会での料理に起源があるとみられるすき焼、くわ焼についても考察を行い堺にその起源のある可能性を指摘した。中世後期に全国で最も繁栄した堺を考古学的に示せるのは、人口密度の高い家屋や寺院などが密集した遺構や、高価な陶磁器類の遺物はよい例である。多くの茶道具も堺の繁栄を示すに十分であり、広い町の広範囲から出土していることも町の価値を高めている。地域の発展の上でも大きな画期であった。

第1節では、この時代の遺跡である「堺環濠都市遺跡」出土の「茶の湯」に関連する

資料の普遍的な広がり、多さなどを示し堺にとっての茶の湯のあり方を考察した。戦国時代に繁栄した都市堺は、堺環濠都市遺跡としてこれまでに多くの発掘調査が行われてきた。当時、千利休をはじめ多くの茶人が政権中枢ともかかわりながら茶の湯をたしなんでいたことは茶会記の記録などにも見え、よく知られているところである。堺環濠都市遺跡の発掘を通じて茶道具類が多く出土していることはよく知られているが、考古学的な堺の茶の湯の実態についてはこれまでまとめられてこなかった。本稿では、発掘調査で出土した茶道具をまず分析し、考古学からみた堺の茶の湯の実態について考察を試みた。その結果、遺跡のどこからでもよく茶道具が出土するのに比べて、茶室の可能性を示す炉壇の出土が少ないことや遺構としての茶室そのものがほとんど確認されていないことがわかった。こうしたことから、専用の茶室を用いない、いわば確立されたルールに則らない形で茶の湯も含めて、町中で茶の湯が広くおこなわれていた可能性を浮かび上がらせた。

第2節では、茶道具の中でも数的に少ない茶壺に関して、特に堺出土の緑灰釉四耳壺に焦点を絞って考察した。利休所持茶壺「橋立」に極めて似た作りの小型の中国製四耳壺が、堺環濠都市遺跡から数点出土している。その出土品を利休所持橋立と比較しながら検討した結果、全体の法量、製作法、釉薬などに共通点を確認した。堺環濠都市遺跡からは茶道具類の出土が多いが、茶壺は多く見つかったわけではない。この種の茶壺は複数個確認されているがいずれも唐物であり、優品と位置づけられよう。来歴は不明ながらも唐物として一定の価値を付すことができるものである。今は失われてしまった「橋立」の本壺を考える上においても貴重な資料群として位置付けられると評価した。

第3節では「堺環濠都市遺跡」から出土している「鉄製鋤鋏先」に注目し、茶会の料理としても登場したであろうすき焼、くわ焼の道具である可能性について考察した。現代の「すき焼」とは違う「すき焼」あるいは「くわ焼」という料理が江戸時代にあったことが知られている。このネーミングから、鋤や鋏を用いて焼くことが理解される料理である。堺環濠都市遺跡の慶長20年(1615)被災の蔵などから、この鋤あるいは鋏の先である鉄製品が出土している。町の中の蔵などに鋤や鋏を入れておくことはあまり考えられず、鉗が共伴する例もあって、たとえば茶会などに用いる調理具の可能性があるのでと考えた。そうであるならば、他の遺跡での類例は聞かないので、「すき焼」「くわ焼」の起源が堺である可能性も大きくなったと考えた。

第4章では、堺発展の第四の画期は徳川幕府の天領となった江戸時代にある。この時代、堺は一地方都市となったが、これまで繁栄してきた都市としてのポテンシャルは高

く、江戸、京、大坂の三都に次ぐ都市ともいえる存在であった。古代の陶邑窯跡群の須恵器生産以来、窯業が盛んであった地域の伝統をひく近世堺の代表的な堺産の播鉢の事例について考察した。播鉢以外にも堺瓦は江戸、和歌山、萩、長崎などでも使用が確認されており堺の窯業生産の実力を近世において大きく示している。他に地産地消に近いレベルのやきものである八田焼についても文献史料を交え実態を解明した。

第1節では、主に18世紀において全国で使用されていた誰もが備前焼と考えていた播鉢が、昭和60年(1985)度の堺環濠都市遺跡の発掘調査成果によって、堺産の播鉢(近世史料では堺摺鉢)であったことを明らかにしたことをうけて、さらに掘り下げて考察した。さらに文献史料を広くあたるなかで、その生産、流通、販売から技術伝播に至るまで幅広く考察した。古墳時代の須恵器生産から地産地消の域を超える窯業生産の歴史は脈々とあり、堺摺鉢は主に18世紀には備前焼、丹波焼にとって代わる播鉢として全国を席卷した実態を解き明かした。

第2節では市内の八田荘と呼ばれる地域において焼かれていた土器の実態について、粘土採掘坑の発掘調査をきっかけに研究した成果をもとに考察した。堺市中区に東八田という近世の村を起源とする集落がある。地元ではここを「壺(坪)はんた」と呼び、かつて壺を焼いていたことが伝承されている。いっぽう茶の湯で用いる灰器を「半だ」といい、八田の刻印を持つものも知られている。周辺の遺跡の調査では主に15世紀以降に瓦質あるいは土師質の土器を作るための粘土採掘の跡が見つかっている。どうやら、15世紀以降18世紀頃にかけて八田の周辺で土器生産が行われていたようである。本節では、粘土採掘跡の発掘調査成果に近世文献をくわえて八田焼の全容を解明した。近世におけるこうした窯業生産は堺地域が活性化していたことをよく示している。

第5章では第五の画期にあたる近代の堺について、歴史資料を中心として考察した。倒幕後、慶応4年(1868・明治元年)6月に堺県が誕生し、明治22年4月には市制施行により全国で誕生した31市に堺市も含まれている。開国の動揺ともいえる慶応4年2月の堺事件は、これまで数多くの文学作品や研究対象となってきたが、関係資料の掘り起こしは十分とは言い難かった。地元の資料を掘り起こすことで新たな見解を提示した。また、堺県時代の明治6年に全国初の公園設置の施策が国から出されたのに伴い、堺県は浜寺公園の設置を申請し同年12月開設となった。国内最古級の公営公園の誕生である。この経緯について整理し近代県政の先進的事業として紹介した。また、農村部では江戸時代以来、綿やサトウキビ、タバコなどの商品作物の生産が盛んであったが、明治になって

とうがらしの栽培が突如として盛んになったことを明らかにした。第2次世界大戦の終戦時の内閣総理大臣である鈴木貫太郎は、慶応3年に堺で生まれた。すぐに明治となったため堺に居住した期間は短い、地域の住民との交流はその後も続いた。地域においてもこうした事実は知られるところは少なかったが、地域に残る史料を掘り起こすことで少しずつではあるが実態がうかがえることを示した。明治初年からの時期、堺においても事件、施策、産業など多くの歴史が紡がれていた。文明開化という大きな画期であった。

第1節では、明治維新直後の慶応4年2月15日に堺で発生した堺事件について取り上げた。堺事件は、文学作品の題材としては多くとり上げられているとはいえ、その規模と反響の大きさに比べて一般にはほとんど知られていないであろう。事件後の世情もあってか、土佐藩士側に同情的な記述が多いのも事実である。特に地元の史料をとり上げることでこれまでの堺事件の評価が如何なものであったかを批判的に考察した。開国和親が主張されるなかで起こったこの事件は、土佐藩隊長のもつ攘夷思想に事件の主因があると考えた。

第2節では、堺県が開設した浜寺公園をとり上げた。堺市西区に所在する浜寺公園は、明治6年12月に国内最古級の公園として堺県が開設した。これは堺県の行政が先進的であったことの象徴として扱われることもある。考察にさいしては浜寺公園についての歴史的背景や公園設置の契機、経過などを具体的に取り上げた。浜寺公園となる高師浜は古来より景勝地であったが、近代化が進むなかで幾度か受難の時代を迎えた。都市域における貴重な緑地として大きな恩恵を市民に与えている現状は、明治期の先進的施策が正しいものであったことを示している。くわえて、この公園開設の契機となった大久保利通の来堺の時期について同時代史料を丁寧に確認する事で、これまで定説のように語られていた明治6年7月に根拠がなく9月の可能性が高いことを論証した。

第3節では、明治に入ってから農産品生産における新たな試みが広がるなかで、とうがらし（蕃椒）栽培を取り上げ考察した。堺のとうがらし栽培については、数少ない史料を検討するなかで明治後期になって突如として始まったことを突き止めた。また数多くの品種のなかで、改良のため種類の選択、内外の見本の収集に意を注いでいたことが知られた。明治時代になって現在の堺市域で勃興したとうがらし栽培の歴史を振り返る中で、従来の作物の栽培に拘泥することなく新たな優良作物に切り替え全力で生産にあたるという当時の人々の積極的な農業経営を明らかにできた。

第4節では、堺生まれの終戦時の内閣総理大臣鈴木貫太郎に関連する地元の資料を紐

解き、これまで知られることのなかった堺地域の人々との交流を考えた。堺市中区伏尾は、江戸時代後期関宿藩久世氏の飛地でありその陣屋がおかれていた。鈴木貫太郎はその代官の子として慶応3年に誕生した。地元を除くとこのことを知る人も少ないようである。伏尾の中辻家及び鉢峯寺の法道寺の資料を通して鈴木貫太郎と地域の人々の交流に光を当てた。両資料の分析から、泉州北部の当地域において鈴木貫太郎の人望が厚かったことを読み解いた。

終章では、各章の総括を行うとともに画期について考えた。

本論で示した堺の5つの画期は、1 古代、2 古代から中世前期、3 中世後期、4 近世、5 近代である。歴史を通じて画期があるように見受けられるが、地域活性化で見た時にどうしても盛衰はあり、まさに波の盛の部分があるところとみている。

地域における遺跡のあり方をみると、たとえば、旧石器時代から近代まで連続と続く遺跡はまずないであろう。これを古墳時代から、あるいは奈良時代からと読み替えた時にはいくつか数は増えるであろうが、全ての遺跡が連続と生活を営んだところとなることはまずない。土地利用において、田畑の時期をどう見るのかという問題は確かにあるが、長岡京遷都後の平城京城の多くが田畑に変わったところを見ても、そこが盛の状態を維持したとは言い切れないであろう。

本論においては堺という地域を主に考古学的手法で考察したが、この堺という地域に多くの画期があることを明らかにできたことは成果のひとつだと考えている。全国に多くの市町村があるが、これほど多くの画期を設定できる場所は多くはないであろう。結局、堺がこうした歴史をたどってきた理由は、堺の地理的位置に理由を求めざるを得ないと考えている。瀬戸内海の東端であること、飛鳥、奈良、京都、高野山、熊野三山、大阪との位置関係、さまざまな要素が複合的に作用した結果にほかならないであろう。単純化すれば堺は人流や物流の巨大なハブ機能を有していたといえよう。くわえて、令制国成立後のことになるが、地名起源でも触れた摂津国と和泉国の国境に成立した町であることも何らかの作用を成していると思う。全国の市町村の中でもきわめて個性的な歴史を持つ堺ということかできる。

今後の課題は、本論の画期の設定についてさらに精緻なものにするべく、古代のなかでも8世紀前半、行基の活動した時代について考察することである。この時代は地域の活動は盛んであった。土塔については発掘調査を重ね、調査報告書の刊行、史跡整備も行われている。ただ、他の同時代の寺院跡や集落跡については、考古学的な検討が十分に行

うことができおらず、最大の課題であると考えている。取り組みとしては8世紀前半の遺跡については、街道との関係に留意しながらひとつひとつ検討していきたい。とりわけ美原区域での発掘調査の進展があり期待を持っている。くわえて、盛衰の衰の部分の検討も行う必要がある。どの程度、人々の活動が停滞していたのかを明らかにし考察することは大きな意味があろう。気候などの自然条件を考古学的に検証することは難題であろうがそうしたことも視野にいれておきたい。この2点を今後の課題として研究に取り組んでいきたいと考えている。

以上、「画期からみた堺の考古学的研究」の要旨を述べたが、この成果は、堺の地域史を主に考古学的に考察することにより、ある意味で「学の実化」を形にして地域に貢献できたのではないかと僭越ながら考えるところである。